

この30年間で脊椎外科を大きく発展させたのは、インストゥルメンテーション、MISとともに画像診断技術であろう。私が研修医時代、脊椎外科の画像診断といえば、単純レントゲン、ミエログラフィー、そして当時新技術のCTミエロであった。その後、MRIの出現、そしてCTの進化が脊椎・脊椎外科手術を飛躍的に進歩させた。昔は手術をしても今ほどよくならない患者さんが多かったが、それは術前診断の精度の影響が大きかったと思う。さらには、詳細な術前診断だけでなく、手術の分野でもナビゲーションなど画像技術の応用によって、手術そのものが低侵襲で正確に行えるようになった。今でもすべての患者さんを完璧に治せるわけではないが、診断と手術の精度の向上により、術後の状態を比較的正確に予測できるようになっている。そのため術前から術後成績についてかなりはっきりと説明ができ、患者さんの信頼や満足度を得ることにつながっている。

一方、病歴や理学所見に比して画像診断の比重が巨大化したため、画像所見に引っ張られて診断を誤ってしまうという例が散見される。特に若い先生方には、診断というのは、主訴、病歴、理学所見、各種検査、そして画像のすべてをできるだけ矛盾なく説明できる病態をみつける作業であることを肝に銘じてほしいと思う。誤診とまではいなくても、患者さんの症状ではなく、画像を直す手術が行われていることも多い。

家電製品と同じで、画像技術は往々にして知らないうちに進歩している。今回は、画像診断を大きく引っ張ってきたMRI、CTの最近の進歩についてまとめてもらった。特集を読んで、アップデートした画像診断の知識を日頃の臨床に生かしていたできれば幸いである。

さて、今年度から私は編集委員に加えていただいた。1つのことを多角的に論議することは大変重要で、一方向からだけでは見えないものが見えてくる。私は整形外科、脳神経外科、神経内科、放射線科がそれぞれの立場から1つのテーマに焦点を当てる「脊椎脊髄ジャーナル」を以前から愛読し多くのことを学んできた。今後、この特長を最大限に生かして読者の皆様のお役に立てるよう、微力ながら尽力したいと考えている。皆様の忌憚のないご意見をお待ちしている。(根尾昌志)

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

長島親男 小野啓郎 萬年 徹
高橋 昭 金田清志 小山素磨
小柳知彦 田代邦雄 国分正一
服部孝道

編集委員

徳橋泰明 (編集委員長)
金 彪 (副編集委員長)
青木茂樹 安藤哲朗 園生雅弘
高橋敏行 高安正和 田口敏彦
谷 論 中村雅也 根尾昌志
飛驒一利 松山幸弘 山崎正志

Vol. 29 No. 9

(2016年9月25日発行)

毎月1回25日発行

1部定価 (本体2,300円+税)

(配送料別)

年ぎめ予約購読料 30,700円+税

送料弊社負担

発行/株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

(担当：山岸)

印刷所/三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所/

(株)文栄社

TEL 03-3814-8541

(株)ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.

6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2016,

Printed in Japan

JCOPY 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉

本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構(電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。